

けやき分科会 目指す児童像

自分の特性に気付き、めあてをもって活動に取り組む児童

単元名 「話し合いの段階を使い、苦手なことにも挑戦しよう」

活動名 「わたしたちのお店やさん」「クイズ〇人に聞きました」

本時の目標 話し合いにおける自分の苦手なことに挑戦しながら、答えや意見を一つにまとめることができる。

学習活動	○指導上の留意点	◆評価 ★評価方法
・前時の振り返り		
・めあての確認	話し合いの引き出しを使って活動しよう	
・それぞれのめあての段階の提示と確認	○前時の活動を振り返り、達成しているめあてや次に挑戦すべきめあてに目を向けさせる。	
・活動①「わたしたちのお店やさん」に取り組む。 ・めあての段階の振り返りを行う。	○情報カードは口頭でなら共有しても良いことを伝える。 ○自由な話し合いを展開するため、司会等役割はあえて設定をしない。 ○めあてが達成できたら教員が花丸をつける。主観的な振り返りが難しい場合は相互評価を取り入れる。 ○階段が達成できたら次のめあてに取り組ませるが、活動①で十分にできなかったと感じる場合は、引き続き同じもので行う。	◇情報カードをもとに話し合う中で、自身の選択しためあてを達成するために、苦手なことにも挑戦しているか。 [★話し合い・観察]
・活動②「クイズ〇人に聞きました」に取り組む。 ①個人で考える ②全員で話し合う ・めあての段階の振り返りを行う。	○児童の興味関心を引き出せるような身近なテーマを設定する。 ○目標点数を設定する。ランキングに入っていたら1点、順位をぴったり当てることができたら3点加算する。 ○活動①と同様に主観的な振り返りが難しい場合は、相互評価を取り入れる。	◇めあての段階を振り返り、新しい苦手なことに挑戦したり再度向き合ったりして話し合いを進めているか。 [★話し合い・観察]
・般化の話聞く。 ・振り返りを行う。	○学校生活における具体的な場面を取り上げ、振り返りに繋げる。 ○「学級で活かしたいこと」を視点に振り返らせる。	◇本時を通して向き合った苦手なことを在籍学級でも活かそうとしているか。 [★発言]

研究主題に迫るための工夫

① 得意と苦手についての自己理解

2学期始めに得意・苦手に関する自身の傾向を踏まえるための授業を行い、児童の自己理解を図った。自身の傾向を掴み、毎時間の個人のため選択の際に苦手なものに挑戦する力を育てる。

② 個人のためあての設定

話し合いにおける自分の得意・苦手を視覚化するためにめあての階段を用意した。話し合いのコツ4項目を得意→苦手の順に並べ替える。その際、前時の話し合いの様子（録画）を見ながらチェックシートをつけさせる。チェックシートをもとに作成した階段を見ながら個人のためあてを選択させる。

③ 操作をしながらの話し合い

情報を視覚化するために情報カードや選択肢カードを用意し、手元で操作しながら話し合わせる。

板書



【分科会の成果と課題】

<成果>

- ・「めあての階段」シートは、自分が挑戦する課題が可視化されていたため、話し合いにおける自身の得意苦手の傾向を見つめることや目標設定をするのに有効であった。
- ・題材設定は次の3点について工夫をしたことで、児童が興味をもてる内容となった。
 - ① 互いに情報を伝え合う必要性のあるものであった点
 - ② 児童に身近な話題を取り上げたという点
 - ③ みんなが参加しやすい難易度であった点
- ・学んだことを学級のどのような場面で生かせるかを考えさせる振り返り（般化）が有効であった。

<課題>

- ・話し合い活動の際の座席配置は、正面ではなく対等に話し合えるよう三角形など工夫できるとよい。
- ・特別支援教室の研究授業の持ち方については、児童への負荷（クラスで一人だけ残ること、数人を大勢の先生に見られること）を考慮し、今後もビデオ録画という方法を取れるとよい。

【講師からの指導】

- ・実行機能とは「解決したいことに対して、成果をあげるために、総動員する様々な能力」。自分もっている実行機能の力を十分発揮するには自己理解の力が必要である。今回の授業は、自己理解の力を鍛える内容だった。児童に合った学びの場であったため活動が成立していた。
- ・児童が面白さ、優越感、メリット、便利さ、達成感などを感じられるような授業づくりが大切である。